

北漢江流域における西北韓系金属器の出現と展開過程

金 想民*¹

訳：平郡達哉*²

Process of the Appearance and Development of the Northwestern Korean
Metalware in the North Han River Basin

KIM, Sang Min

Translation : HIRAGORI Tatsuya

キーワード：北漢江流域、紀元前 2~1 世紀、南楊州琴南里遺跡、鑄造鉄斧、双鳥形觸角式劍、
衛滿朝鮮系

はじめに

韓半島中部地域における原三国時代の物質文化は、いわゆる「中島文化」を指標とした考古学文化類型を中心に研究が進められてきた。中島式無文土器に代表される原三国時代の物質文化については、中島式土器、打捺文土器、楽浪系土器の登場時期、粘土帯土器との関連性など土器に対する研究、そしてこのような中島類型に比定される呂字形および凸字形住居址に対する編年と起源に関する研究が主流をなした。また、金属器については加平馬場里、梨谷里、中島遺跡から出土した鉄器に関する報告が行われ、これらの資料について漢の発達した製鉄技術が反映されたものと考え、具体的には楽浪との関連性が指摘されている（李南珪 1983）。その後も鉄器を中心とした新たな金属器資料は増加しているが、楽浪郡設置以降のものと考えられている。

特に加平達田里遺跡の埋葬遺構から出土した鉄器をはじめとする金属器は楽浪系土器と共に副葬される点が注目され、紀元前 1 世紀代に楽浪系住民の南下による鉄器文化の伝来という従来の認識はさらに強固になった。それにもかかわらず、達田里遺跡の調査・報告では楽浪古朝鮮系土壙墓という用語を使用する（朴成熙 2003）など衛滿朝鮮を意識しており、これは中部地域における金属器等の先進文化伝来の起点を漢文化に限定しないきっかけともなった。

その後、加平大成里遺跡の発掘調査と報告が行われ、鉄器を中心とした先進文物の登場時期を紀元前 1 世紀に限定できないという見解も提示された（鄭仁盛 2009、金武重 2012）。加平大成里遺跡の調査・報告が行われたことで北漢江流域における鉄器文化の成立と展開に対する議論の幅が広がったことは確かであるが、墳墓と住居址という異なる性

*¹ 韓国国立木浦大学校考古文化人類学科

*² 島根大学法文学部社会文化学科

格の遺構から出土した遺物を基にした議論であるという点で限界があった。また、加平大成里の場合、鍛造鉄製農具と武器類が副葬されたのに対し、加平大成里B地区では鍛造農具類のみが出土しており、相互の比較を通じた関係性の推定は容易ではなかった。

一方、近年調査・報告された南楊州琴南里遺跡と春川牛頭洞遺跡では、加平達田里遺跡の金属器と比較可能な遺物が出土した。琴南里遺跡の3基、牛頭洞遺跡の1基の墳墓からは鉄斧、鉄鎌などの鉄製農具類とともに、青銅製品とセットをなす鉄矛、鉄剣などの鉄製武器類、乙字形銅器などの青銅器類が出土した。特に琴南里2号墓は加平達田里2号墓と同じ金属器構成を見せており注目される。また、これらの遺跡は北漢江の河口から昭陽江と合流する中流一帯に分布しており、中部地域内でも北漢江流域の重要性を物語っている。

北漢江流域における金属器に関する研究は、主に原三国時代～漢城百濟期の住居址出土鉄器を対象に行われている（李サンギル 2015、権度希 2017、崔煥珉 2017）。これまでの研究は原三国時代から漢城百濟への転換過程で鉄器が担った役割に重点を置いたものであった。西北韓地域の物質文化がどのような背景を基に北漢江流域に登場し、韓半島南部地域の地域集団にどのような影響を与えたかについての議論は不足していた。そのような意味で近年発表された権度希の研究は、西北韓系物質文化の流入と展開を総合的に検討したという点で意義が大きい（権度希 2020）。

本稿では、中部地域における金属器の登場時期に言及し、韓半島南部の地域集団との関係性に注目したい。先述した北漢江流域で確認される西北韓系墳墓副葬品を中心に相互比較分析を通して、その登場時期と展開過程を

提示したい。また、中部地域における物質文化と三韓の一部地域で見られる類似性を再検討し、北漢江流域の墳墓に副葬される金属器の登場背景と三韓との関係について推定してみよう。

1. 北漢江流域における西北韓系墳墓と副葬品

これまで調査された北漢江流域における西北韓系墳墓は、北漢江流域に沿って南から南楊州琴南里遺跡、加平達田里遺跡、春川牛頭洞遺跡の順に分布する。木棺または木槨墓3～4基が小規模な群集をなしており、集中した大規模群集墓の様相は見られない。この3遺跡の墳墓に副葬された遺物をみると、泥質系短頸壺、花盆形土器の副葬において共通しており、鉄器を中心とした金属器の副葬では南楊州琴南里と加平達田里遺跡の類似性が高い。特に、琴南里2号墓と達田里2号墓で見られる双鳥形触角式鉄剣は、同時期に製作された可能性が高いとされている（漢江文化財研究院 2020b）。一方、琴南里3号墓での青銅環多量副葬は春川牛頭洞1号墓の事例と類似している。

北漢江流域における西北韓系墳墓の存在を明らかにした加平達田里遺跡2号墓では花盆形土器、短頸壺、双鳥形触角式鉄剣、環頭刀、鉄戟、鉄剣、鍛造鉄斧が副葬されている。

報告者は双鳥形触角式鉄剣に注目し、伝平壤、大邱飛山洞、慶山林堂洞、平壤土城洞486号出土品を挙げつつ伝平壤と飛山洞出土品が類似していると見た。達田里2号墓出土の環頭刀は西北韓系墳墓出土の環頭刀と比較すると、長さ40～50cm前後の中型で貞栢洞53号墓、雲城里5次2号墓出土品と類似している。鉄戟と鉄斧、鉄剣については西北

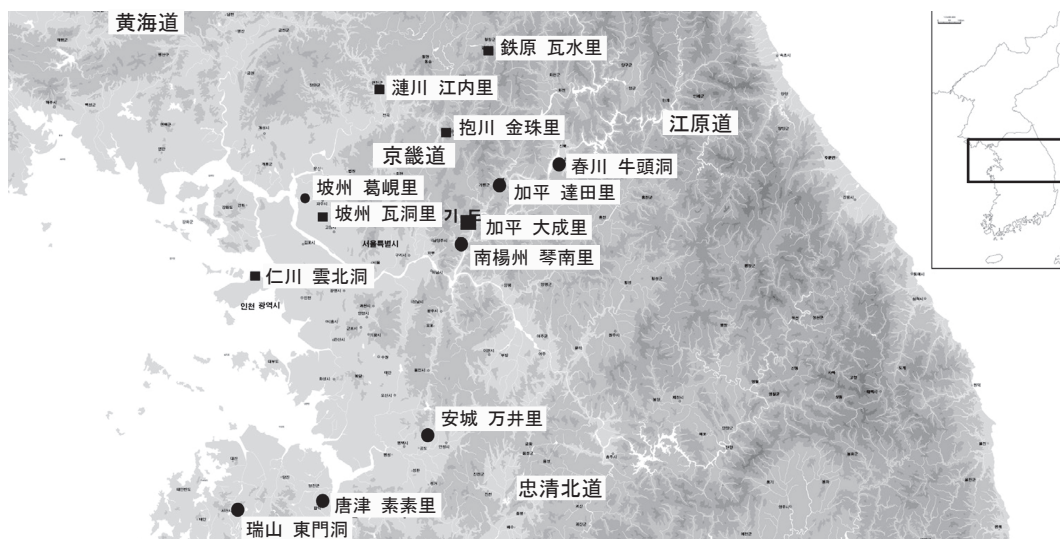


図1 北漢江流域における西北韓系墳墓の分布と中部地域の関連遺跡 (●墳墓、■住居址)

韓系墳墓内の出土現況のみが提示された。また、達田里3号墓出土の細形銅剣は、李清圭の型式(CⅢb式)を参考にして雲城里9号墓、黒橋出土品と同じ型式に設定されている(盧熾眞ほか2007)。

ここでは加平達田里2号墓に副葬された金属器を中心に、南楊州琴南里2号墓に副葬された金属器を比較してみたい。まず、双鳥形触角式剣把を持つ鉄剣が出土するという類似性はあるが、剣格の有無に違いがある。また、琴南里2号墓に副葬された環頭刀は青銅製環頭を持つという違いがある。農工具では両墓で鉄剣が共伴する様相を見せるが、小型の鍛造鉄斧2点が副葬される達田里2号墓とは異なり琴南里2号墓では断面長方形の鑄造鉄斧が副葬される。達田里2号墓の鍛造鉄斧は琴南里4号墓のそれと類似したパターンを見せているが、鉄矛や鉄鏝、鉄刀子と一緒に副葬されるなど器種の組み合わせに違いがある。このように北漢江流域における西北韓系墳墓に副葬された金属器は、遺跡単位で器種の組成を比較すると同じように見えるが、墳墓各々の副葬品を比較すると少しずつ混在し

た副葬の組み合わせを持つ。

このように加平達田里遺跡を鉄戟と環頭刀、2点の鍛造鉄斧、花盆形土器などに注目して紀元前1世紀前中葉と報告し(盧熾眞ほか2007)、北漢江流域の西北韓系墳墓で見られる副葬品の類似性を根拠に最近調査・報告された南楊州琴南里遺跡、春川牛頭洞遺跡も同時期と見る傾向がある。

一方、近年調査された南楊州琴南里4号墓に副葬された粘土帯土器を根拠に、より古い時期に築造された可能性も提起されている(漢江文化財研究院2020b)。これと関連して琴南里1号墓の三角透かし器台と琴南里3号墓の乙字形銅器、琴南里4号墓の三角形粘土帯土器などを根拠に時期を調整する余地を残した(ホ・ビョンファン2020)。権度希は琴南里遺跡の築造時期が樂浪郡設置以前にさかのぼる可能性を示し、その根拠として4号墓に副葬された格子文のある小型短頸壺と高台を持つ粘土帯土器、2号墓の双鳥形触角式鉄剣、断面長方形の鑄造鉄斧など具体的な事例を挙げた(権度希2020)。また、琴南里4号墓で花盆形土器に代わって三角形粘土帯土器

表1 北漢江流域における西北韓系墳墓と副葬品の現況

遺跡名	号数	金属器	土器	出典
加平 達田里	2号墓	鍛造鉄斧2点、鉄鎌2点、双鳥形 触角式鉄剣、環頭刀、鉄戟	花盆形土器 短頸壺	盧熾眞ほか 2007
	3号墓	細形銅剣、劍格、鉄剣、鉄轡	花盆形土器	
春川 牛頭洞	1号墓	青銅環 14点	花盆形土器 短頸壺	漢江文化財研究院 2017
南楊州 琴南里	2号墓	鑄造鉄斧、鉄剣、鉄矛、双鳥形触 角式鉄剣、環頭刀、青銅製環	花盆形土器 短頸壺	漢江文化財研究院 2020a・b
	3号墓	乙字形銅器、青銅環 21点、青銅 環 10点	花盆形土器 短頸壺	
	4号墓	鍛造鉄斧2点、鉄鎌、鉄鑿、鉄刀 子、鉄剣、鉄矛	粘土帯土器 短頸壺	

域における鉄器文化の流入時期を紀元前1世紀代に設定した(金想民 2018b・2021)。

一方、韓半島南部地域における比較的古い時期の木槨墓に副葬された鍛造製品を含む鉄器の製作と使用時期を

が副葬されることを根拠に、花盆形土器が中島式土器段階ではなく粘土帯土器段階のものであることを指摘し、西北韓系木棺(槨)墓の築造時期に関する問題が提起されている(金武重 2020)。つまり、楽浪郡設置(紀元前108年)を基準にした場合、楽浪郡設置以降なのか楽浪郡設置以前なのかについて、より深い議論が必要な状況であるといえる。

2. 北漢江流域における西北韓系墳墓間の前後関係と時間性

先に対象とした北漢江流域において西北韓系墳墓が調査された3遺跡の6基に対する金属器の分析では限界がある。これは南楊州琴南里遺跡が調査され注目を集めているものの結局、6基の墳墓で確認された金属器のみを分析対象とせざるを得ないためである。ここで出土した金属器の数量も多くなく、単純な比較を通して類似点と相違点を確認する程度しかできない。また、築造時期についても、これまで先行研究で主張されてきた楽浪との関係性を考慮した時期比定のみでは紀元前1世紀をさかのぼることができない¹⁾。つまり、楽浪郡設置に伴う先住民の移動という見解を超えるような根拠を見いだすことができなかった。筆者もかつての論考で加平達田里遺跡をはじめとする西北韓系資料を含む中部地

楽浪郡設置以前と見るか、それともいわゆる「衛満朝鮮時期」と見るかについての議論がある(金セボム 2014)。具体的には平壤上里遺跡などいくつかの事例は紀元前2世紀にさかのぼり、これまで多くの研究者によって支持されてきた高久健二の年代観(高久 1995)を脱却すべきだという見解が提示されている(鄭仁盛 2013)。

ここでは本稿で分析対象とした北漢江流域の西北韓系墳墓から出土した各種金属器を調べ、器種構成と組み合わせを比較検討してみよう。これを通して各墳墓で見られる遺物の違いが時間性を見いだす基準となりうるのかについて考えてみたい。

(1) 副葬品から見た墳墓間の前後関係

北漢江流域における西北韓系物質文化の登場と展開過程を把握するために、墳墓内に副葬された遺物の器種と組み合わせを調べた。金属器のうち農工具と武器類はそのほとんどが鉄製品であるのに対し、武器や馬具の付属品や装身具は青銅製品が多い。また、琴南里3号墓と春川牛頭洞1号墓では多量の青銅環が副葬されるという共通点がある。琴南里3号墓出土の乙字形銅器は韓国で初の出土事例となる。この遺跡では泥質系短頸壺と花盆形土器がセットで副葬されるという共通点があり、南楊州琴南里4号墓の場合、花盆形土器が三角形粘土帯土器に置き換えられている。

表 2 北漢江流域における西北韓系墳墓の副葬様相 (○ 1 点、◎ 複数、● 多数)

遺構	副葬品	金属器類												土器類			
		農工具					武器類				付属品・装身具			短頸壺	盆形土器	粘土帯	
		鋳造鉄斧	鍛造鉄斧	鉄鎌	鉄鋳	鉄刀子	劍	環頭刀	矛	戟	触角式劍把	劍格	轡				青銅環
南楊州 琴南里 2号墓	○			○		○鉄	○銅	○鉄		○			○		○	○	
加平 達田里 2号墓		◎	◎			○鉄	○鉄		○鉄	○	○銅		○		○	○	
南楊州 琴南里 4号墓		◎	○	○	○	○鉄		○鉄							○		○
加平 達田里 3号墓						○銅					○銅	○鉄				○	
南楊州 琴南里 3号墓													●	乙字形銅器	○	○	
春川 牛頭洞													●		○	○	

表 3 西北韓地域における紀元前 2 ～ 1 世紀の墳墓副葬金属器の現況

器種 遺跡	農工具												武器類												付属具											
	斧類				鎌			鋳類					鍛冶具 鋤	刀子	劍			環頭大刀	矛	鐵			青銅戈	戟	弩器	馬具 青銅	車馬具 青銅	鐵釜								
	青銅斧	鋳造 (I)		鍛造 II-1	板状 3a	鍛造 (II)			青銅鋳	鐵鋳					細形劍	鐵劍	漢式			青銅	鐵															
		A-1	A-6			1	2	3		II-2	II-3	II-4	青銅	兩翼				三翼	三角																	
松	◎	●						◎						●			●																			
石	●																●									●										
上		●	●													●	◎			●					●		●	●	●							
富			●									●				●	●			●															○	
金			◎						○ 2							●	◎											●							◎	
葛				●												●	●							●											◎	
栢 1			◎						◎					◎		◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎	■ 6	■ 9		◎	■	■	■	■	■				
雲 3			◎					○						●			●	●	●	●	●															
栢 62		●			●						◎				●	◎	◎		◎								●								■	●
栢 3		●													●	◎	◎																		■	●
雲 5		●												●	◎	◎																			■	●
梧 10			◎											●													●								◎	
栢 10		○																																		
台 6			◎		●								●	●			◎																		●	
台 8			◎			○				◎	●				◎			◎																		◎
台 15			◎			●				○					◎													●								
台 9			◎		●																															
台 13			◎			○					●																									
雲 9			◎		●										●		●																		●	
栢 36			◎			●																														
栢 49			◎		●																															
順			◎																																	●
栢 53		●																																		◎
栢 81		◎		○					◎					◎			◎																			◎
雲 4		◎			●																															
栢 2		○													●	○																				●
台 10			◎		○					◎					●	◎																				■
望 2			◎												●		●																			
栢 67			◎			○								●			●																			●
栢 84			◎																																	●
梧 5			◎		●									●			●	●																		●
岩 219			◎		●									●			●	●																		●
岩 257			○											●																						◎

石：白川 石山里 松：鳳山 松山里 上：平壤 上里 台：江西 台城里 富：載寧 富德里 金：黃州 金石里 葛：雲川 葛城里 雲：殷栗
 雲城里 雲カ：殷栗 雲城里ガマルミ 望：安岳 望岩里 岩：平壤 石岩里 梧：平壤 貞梧里 栢：平壤 貞栢洞 土：平壤 土城里 柏：
 平壤 貞柏里 順：黃州 順川里 ● or ◎：1点 ◎ or ○：複数 ■ or □：多数 ○ or ●：可能性



図2 南楊州 琴南里、加平 達田里遺跡の前後関係

このように琴南里と達田里遺跡の墳墓に副葬された金属器の類似性は顕著である。その中でも同一器種の金属器が一緒に副葬された達田里2号墓と3号墓、琴南里2号墓と4号墓の副葬品を比較して墳墓間の前後関係を設定してみよう。

まず、達田里2号墓の遺物構成、つまり花盆形土器と短頸壺をはじめとして鉄戟、鉄鎌2点、有段式鍛造鉄斧大・小型2点、青銅環は補強土に副葬され、木棺内の腰側で触角式鉄剣と環頭刀を装着した被葬者の状況は琴南里4号墓と類似しているとされる(金武重2020b)。

両遺跡の副葬品をより具体的に見てみると、加平達田里2号墓は南楊州琴南里2号墓と4号墓で見られる金属器の器種構成が混在している。鍛造鉄斧が2点セットで副葬される様相は達田里2号墓と琴南里4号墓で見られる共通的特徴であるが、達田里2号墓に副葬された環頭刀と触角式剣把と組み合わせた鉄剣の例はむしろ琴南里2号墓で見られる特徴である。そして、漢式鉄器の主要副葬風習である大型と小型の鍛造鉄斧の2点セット副葬に注目してみると、時期的な同時性を見出すことができるだろう。

一方、琴南里2号墓の場合、断面長方形の鑄造鉄斧が単独で副葬されており、青銅製環頭部を持つ環頭刀が見られる点は、達田里2号墓より琴南里2号墓が時期的に先行してい

ることを推定させる。西北韓地域における鉄器文化の変化様相で最大の画期は燕系鉄器から漢式鉄器への転換である。戦国燕国から漢に至る鉄斧の変化様相を踏襲しているが、大型の鑄造鉄斧が小型化し、小型の鍛造鉄斧に変化する傾向を見せる(金想民2018b)。そして、鉄斧の単独副葬から複数副葬への変化を最大の画期と評価できる。これと関連し、村上恭通は楽浪墓内の鉄器副葬形態のうち、剣、矛、鎌とともに大小2点の鍛造有銚鉄斧が相伴して基本組成を維持していることに注目し、これを楽浪系鉄器と想定した(村上2020)。

しかし、琴南里2号墓に副葬された燕国系統の鑄造鉄斧を西北韓の白川石山里、鳳山松山里遺跡出土の鑄造鉄斧(I A-1型²⁾)と時期的に同一視するのは難しい。達田里2号墓でも同じ型式(組立双鳥形触角式剣³⁾)の触角式剣把を持つ鉄剣が出土している点と、鍛造製鉄製品が副葬されていることを考慮すると、琴南里2号墓は石山里・鳳山里遺跡のそれよりは新しく、達田里2号墓よりは古いと見ることができる。

これと関連して、琴南里2号墓と達田里2号墓に副葬された双鳥形触角式に見られる剣格に注目してみよう。琴南里4号墓出土鉄剣には剣格が確認されないが、達田里2号墓のそれには青銅製剣格が見られる。剣格の有無によって前後関係があるというよりは、木製

と青銅製劍格という素材の違いによるものだろうが、三韓圏域の初期鉄器時代の鉄劍では劍格があまり見られない。加平達田里2号墓出土鉄劍の劍格に縦方向の装飾的な要素が含まれているという点で、劍格のない鉄劍より新しいかもしれない。

このように、琴南里2号墓と達田里2号墓の金属器に見られる「燕系鉄斧と漢式(楽浪系)鉄斧の違い」、「環頭刀の環頭部素材の違い」、「劍格の有無」は、琴南里2号墓が達田里2号墓より先行する条件である可能性がある。ただし、琴南里2号墓と達田里2号墓の時間的な差をどの程度まで置けるのかに対する検討が必要である。

一方、達田里2号墓と琴南里4号墓の金属器は、双鳥形触角式劍把が見られず、鉄鑿や鉄刀子が相伴している点が最も大きな違いである。鉄鑿は袋部の断面が丸い筆者のⅡ-3型式であり、西北韓地域では特定時期にのみ出土する。この型式の鉄鑿は表3で示したように、西北韓地域の平壤貞栢洞1・81号墓、江西台城里8・10号墓で出土しているが、これらの遺跡では鉄鑿と共に鍛造鉄斧、鉄鎌、鉄劍、鉄矛、鉄刀子、馬車付属具などが一緒に副葬された事例が多い。断定はできないが、達田里2号墓より墳墓内に副葬する金属器の器種が増えたと見ることができる。従来の鍛造鉄斧2点、鉄鎌、鉄劍、鉄矛の組み合わせに鉄鑿と鉄刀子、馬車付属具が付加されたような様相である。

以上のように、北漢江流域における西北韓系墳墓内に副葬された金属器の出土様相を、関連時期の西北韓地域で副葬された金属器の変化との比較を通して前後関係を整理すると、南楊州琴南里2号墓→加平達田里2号墓→南楊州琴南里4号墓の順に築造されたと推定できる。加平達田里3号墓と琴南里3号墓、



図3 江西台城里10号墳出土の金属器

春川牛頭洞1号墓に副葬された金属器の組成様相は、先に整理した遺跡と比較するのは難しい。牛頭洞1号墓と琴南里3号墓で見られる多量の青銅環副葬は、同じ金属器の副葬パターンを共有していると見ることができる。一方、加平達田里3号墓と琴南里3号墓にそれぞれ副葬された新式細形銅劍と乙字形銅劍は江西台城里10号墓と黃州金石里木榔墓でも一緒に副葬された事例が見られる。そして、この両遺跡でも青銅環が副葬される。台城里10号墓に代表される金属器の副葬様相は琴南里4号墓の組み合わせと類似する。そうであれば、達田里3号墓-琴南里3号墓-牛頭洞1号墓は琴南里4号墓の築造段階と関連すると推定される。

(2) 個別墳墓の年代検討

加平達田里遺跡をはじめとする中部地域における西北韓系物質文化の時期について、大枠では紀元前1世紀代とされてきた。前述したように、楽浪郡の治所とされる大同江流域からそれほど遠くない中部地域という地理的な位置、文献記録にみられる古朝鮮先住民の移住を推定できる記事は、中部地域における西北韓系物質文化の時期を特定する根拠として作用した。これによって西北韓系遺跡の時

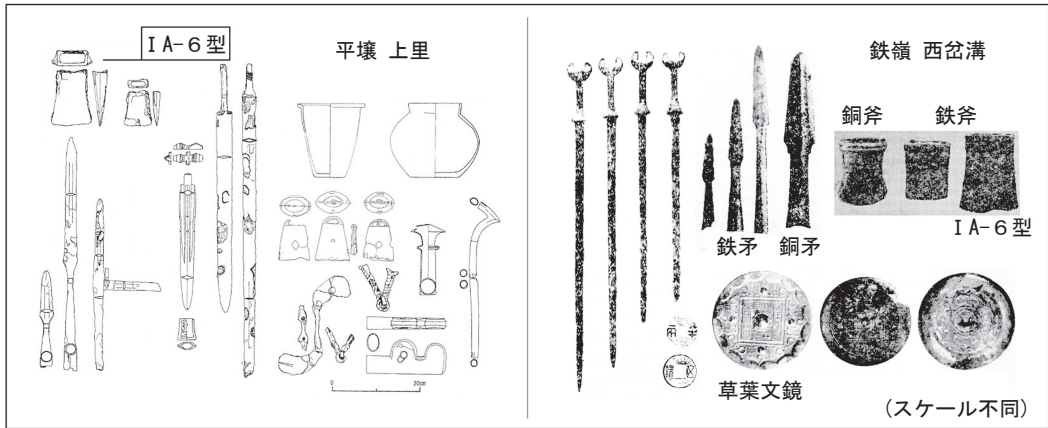


図4 平壤上里遺跡および鉄嶺西岔溝遺跡の墳墓副葬品

期がさかのぼったとしても、中部地域における関連遺跡の時期は紀元前1世紀前葉に限定する傾向があった。

一方、鄭仁盛は平壤上里、銀波葛峴里木榔墓などの事例を辰弁韓地域の出土品と比較することで、その年代を楽浪郡設置前の紀元前2世紀後葉に遡及させた。星州礼山里29号墓、昌原茶戸里73号墓の資料を慶州朝陽洞5号墓のものと比較して時期をさかのぼらせる基準とした（鄭仁盛 2013）。呉永贊もまた辰韓圏域内の諸遺跡について紀元前2世紀までさかのぼることを前提に、西北韓系物質文化の流入を楽浪との関係のみで解釈することはできず、衛滿朝鮮段階との関連性を指摘した（呉永贊 2013）。このように韓半島南部地域の墳墓から出土した剣把頭飾や銅鐸、鑄造鉄製品などの金属製品を根拠に、楽浪郡設置以前の西北韓系物質文化の移動、さらには戦国系遺物の韓半島南部地域への流入についての議論が行われているにもかかわらず、西北韓地域の墳墓と物質文化については、やや保守的な年代観が与えられてきた。

筆者は西北韓地域の鉄器のうち、鳳山松山里と白川石山里遺跡の出土品以外、大半の鉄器を楽浪郡設置以降と見ている（金想民

2018b）。鄭仁盛が指摘するように高久健二の年代観の影響を受けたことは事実である。ただ、上里遺跡を含む表3の太い黒枠部分に該当する遺跡の場合、その時期を遡らせられると考えたが、積極的な根拠を見つけることができず標識遺跡を提示できなかった。それにもかかわらず、韓半島南部地域には紀元前2世紀代にさかのぼる鉄器文化が存在し、その登場背景は西北韓一帯の非漢式鉄器、すなわち衛滿朝鮮の鉄器文化にあると推定した（金想民 2018b）。韓半島南部地域の鉄器文化の時期をさかのぼらせつつも西北韓地域の関連遺跡の時期は調整しなかったのである。筆者は平壤上里遺跡と黄海道一帯（銀波葛峴里、載寧富德里、黃州金山里など）のいくつかの遺跡は、楽浪郡設置以前まで遡ることができると考える。

鳳山松山里と白川石山里遺跡は韓半島西南地域の扶余合松里、長水南陽里遺跡出土資料と対応するため紀元前2世紀前中葉と比定でき、平壤上里遺跡に代表される鍛造鉄製品と青銅製品が共伴する墳墓を紀元前2世紀後葉に置くことにしよう。平壤上里遺跡の鉄斧は鑄造と鍛造がセットをなしており、鑄造鉄器は筆者分類のIA-6型であり、この型式の

鑄造鉄器は紀元前2世紀代の遼寧地域で普遍的に見られる。鉄嶺西岔溝遺跡や大連魚家村遺跡などではI A-5型とI A-6型鉄斧が半両銭、草葉文鏡と共に副葬されており、前漢成立後少なくとも遼東半島と遼東地域北部は漢の物質文化の影響を受けたと考えられる(金想民2021)。この文脈から見ると平壤上里遺跡に代表される西北韓地域の墳墓に副葬された金属製品は紀元前2世紀後葉としても問題ないだろう。

先述した北漢江流域における西北韓系墳墓に副葬された金属器を中心に相対的な順序に並べて個別墳墓の築造順序を整理すると、次のようになる。

楽浪郡の設置

前108年

琴南里2号墓→達田里2号墓→琴南里4号墓
達田里3号墓、琴南里3号墓、牛頭洞1号墓

最も先行すると考えられる琴南里2号墓で金属器は鳳山松山里遺跡と平壤上里遺跡で見られる器種の組み合わせが混在している。しかしながら、漢の物質文化と断定できる要素も明瞭でない。むしろ、鉄嶺西岔溝遺跡で見られる触角式銅柄鉄剣と鉄矛が共伴する様相は、遼東北部の文化要素と類似している。これは燕系鉄器の要素が存在する時期として見ても問題ないだろう。松山里遺跡より新しい紀元前2世紀中頃に比定しておく。

また、達田里2号墓で見られる金属器は紀元前2世紀代の遼東半島と遼東地域北部で見られる漢の物質文化的要素を含んでいる。特に武器類のうち、鉄戟は平壤上里での副葬品と類似している。平壤上里に代表される西北韓地域の紀元前2世紀後葉の金属器と比較される。これを根拠に紀元前2世紀後葉に置くことにしよう。

一方、琴南里4号墓の年代を決めることは容易ではない。実際、複数遺跡の個別墳墓を

対象に相対的な順序を与えても、各墳墓の築造と関連した時期差があると断定できない。達田里2号墓と全体的な遺物の様相は共有している状況で器種が1～2種類増えたという点と時期的な違いがあるかどうかは別問題である。また、その時期幅をどの程度にするかという基準を客観的に提示することはできない。それでも先に提示したように、平壤貞栢洞1・81号墓、江西省台城里8・10号墓の副葬品との類似性を考慮すると、少なくとも楽浪郡設置以降と見るのが妥当と思われる。ここでは紀元前1世紀前中葉と推定しておく。

3. 北漢江流域における西北韓系金属器の出現背景と三韓圏域への展開

前述したように中部地域における西北韓系墳墓はその数は多くないが、北漢江の中・下流一帯を中心に確認されている。中部地域では漣川江内里遺跡、鉄原瓦水里、抱川金珠里、仁川雲北洞遺跡でも同時期の西北韓系鉄器が出土しているが、墳墓との相互関連性は確認されていない。一方、北漢江流域の場合、加平大成里B地区に代表される同時期の集落内でも鉄器が出土しており、加平大成里A地区、春川牛頭洞遺跡など鉄器生産と関連した集落も確認されている。当時、北漢江流域は西北韓系先進文物の流入とそれに続く技術の導入において、中部地域の他地域より先行していたと考えられる。では、中部地域内において北漢江流域はどのような背景から西北韓系物質文化を先取りできたのだろうか。そして、北漢江流域をはじめとする中部地域の金属文化に見られる三韓圏域との類似性は何を意味するのだろうか。ここでは、この2つの疑問点について考えてみたい。

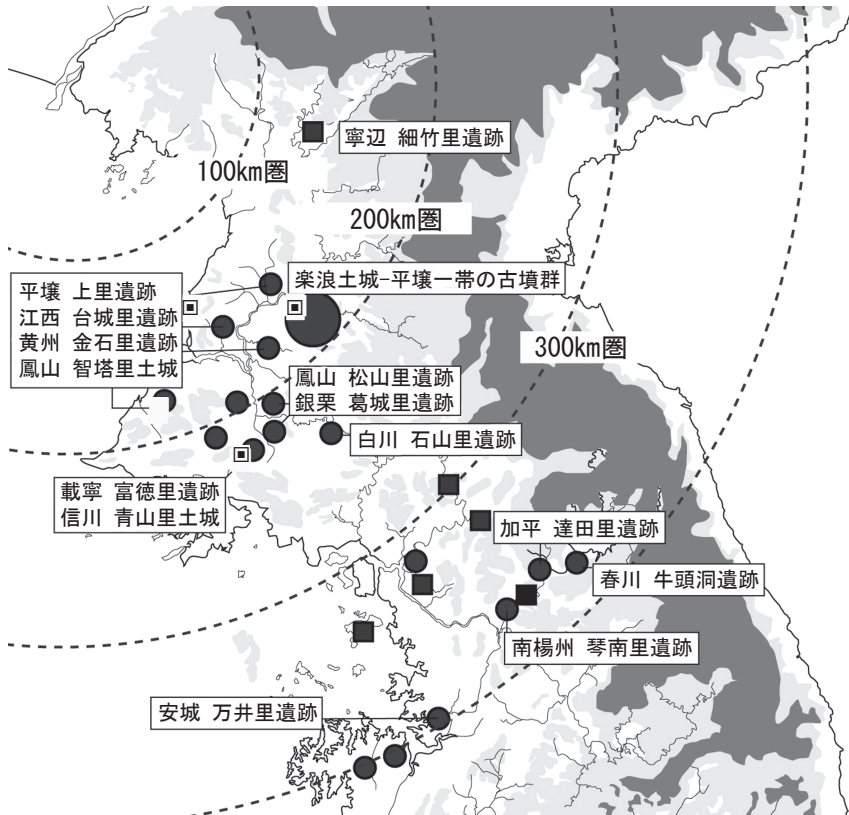


図5 衛滿朝鮮の外縁と北漢江流域 (●墳墓、■住居址、□土城)

(1) 北漢江流域における西北韓系金属器の出現背景

先ほど、北漢江流域の墳墓に副葬された金属器について仮説を含めて3段階に区分した。達田里2号墓と琴南里4号墓の副葬品は時間性を区別するほど違いは顕著でないが、金属器の比較検討という観点からは少なくとも2つの画期があると考え。まず、琴南里2号墓の段階で見られる物質文化の特徴は、衛滿朝鮮後期の産物である紀元前2世紀中後葉と推定し、樂浪郡設置を前後した時点で達田里2号墓-琴南里4号墓につながる連続的な変化があったと見た。つまり、燕系鉄器+土着系金属文化(琴南里2号墓)→漢式鉄器+土着系金属文化(達田里2号墓、琴南里4号墓)につながる西北韓系物質文化の連続的

な流入があったと考えられる。これは琴南里2号墓、大成里B地区で見られる燕系鉄器と北方系土着文化を根拠に、地域的に変容した外来系先進文化が韓半島南部地域の地域政治体に伝来した後、樂浪郡が設置された後も移住、交流などの相互関係の中で漢式鉄器文化が結合した土着文化の一つとして受け入れられたと考えられる。

北漢江流域で見られる西北韓系金属器はどのような背景から流入したのであろうか。筆者が琴南里2号墓の年代を紀元前2世紀代と比定した瞬間、これまで支持されてきた文献に基づく樂浪郡設置と古朝鮮流民の南下という解釈は適用しにくくなる。これと関連して、まず、北漢江流域が衛滿朝鮮の外縁勢力の一つとして存在し、衛滿朝鮮の外縁の境界

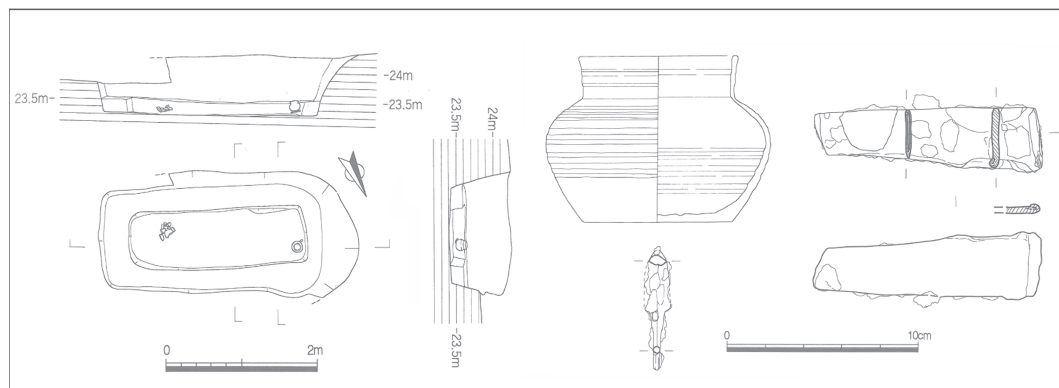


図6 坡州 葛峴里遺跡の墳墓構造と副葬品

としての地方勢力の一つであった可能性がある。これを検討するために、西北部～中部地域における紀元前2世紀～1世紀代の遺跡の分布様相を調べた。図5に見られるように、関連時期の遺跡はよく知られているように平壤の大同江沿岸である楽浪土城の東側丘陵に集中しており、大同江流域を中心に遺跡が分布している。現在までの資料によると、白川石山里遺跡の南側では墳墓が確認されておらず、黄海道から京畿道一帯に漸進的な遺跡の分布は見られない。つまり、黄海道と京畿道の間には一定の空白空間を形成しているのである⁴⁾。西北韓系墳墓が空間的に連続性を持って分布する様相は、衛満朝鮮または楽浪の中心地と言える楽浪土城を起点に半径100km以内に該当する。これと関連して古朝鮮の地域統治拠点と推定される鳳山智塔里土城、信川青山里城、温泉於乙洞土城(※図5の□印)が楽浪土城の100km半径の外縁に存在することは興味深い。そうであれば、衛満朝鮮の住民が認識していた南側の外縁は黄海道一帯まで限定されたのではないかと考えられる。

一方、漢江下流域から北漢江中流につながる沿岸に分布している点は、海路・水路を活用した移動と関連すると推定できる。中部地域に入る漢江の河口に該当する坡州一帯の葛

峴里遺跡と瓦洞里遺跡の存在、仁川雲北洞遺跡で大量に確認される西北韓系遺物の出土は海路を利用した交流を推定させる。南楊州琴南里遺跡から春川牛頭洞遺跡まで北漢江流域に点在する様相は、目的性を持った移動の産物であると言える。北漢江中流には中島文化に代表される地域拠点の文化類型が存在するという点に注目すれば、漢江河口および北漢江下流に見られる関連遺跡の存在は当然のことかもしれない。

これと関連して当時の湖南地域では紀元前3世紀代から完州葛洞・新豊遺跡に代表される万項江・錦江流域、その後、新昌洞遺跡を中心とした榮山江流域に至るいわゆる馬韓圏域内の西北韓系物質文化が確認される。地域によって時期的な違いはあるが、地域拠点集団と接するための要衝である河川周辺に点々と遺跡が分布しているという点で中部地域の現象と類似している。このように衛満朝鮮の勢力は、南部地域の地域拠点集団と交易、交流などの関係を維持するための主体が必要だったのだろう。中部地域も衛満朝鮮の段階から中島文化圏を中心とした北漢江流域の地域拠点集団との往来があったはずであり、このような背景の中で西北韓系先進文物の登場があったのであろう。つまり、衛満朝鮮の段

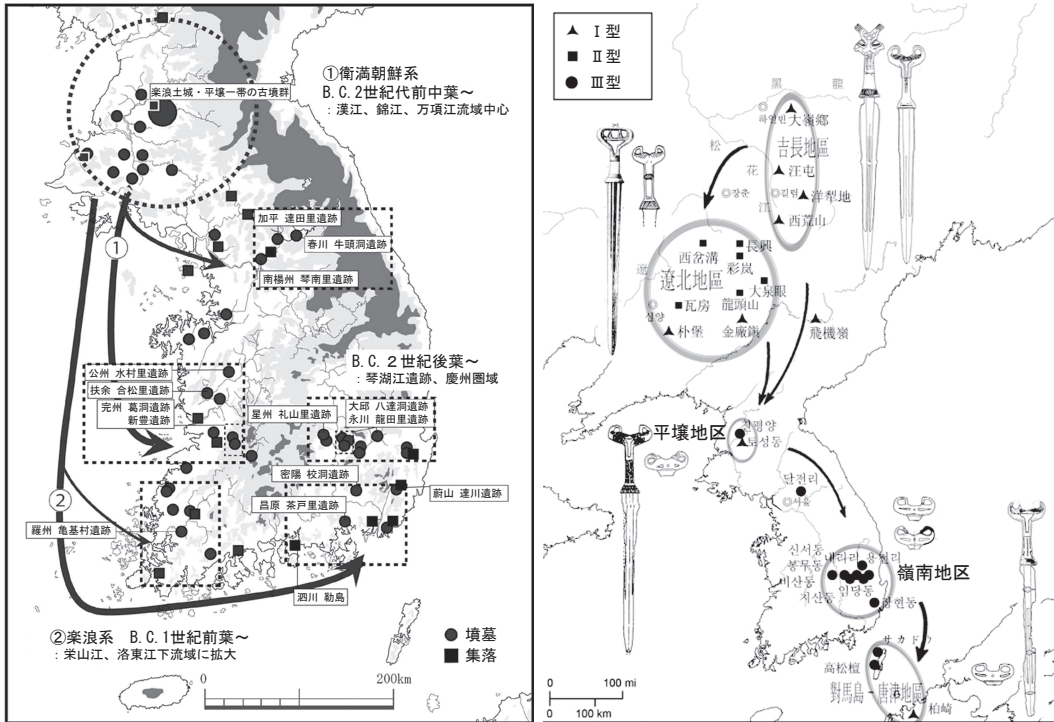


図7 韓半島南部地域における西北韓系物質文化の拡散過程 (右: 朴善美ほか 2012)

階である紀元前2世紀中葉から韓半島南部地域の拠点集団との往来があり、その過程で西北韓系金属器が持ち込まれたと推定される。

これまで調査された遺跡、遺物を基に北漢江をはじめとする漢江流域では紀元前2世紀中葉、錦江・万項江流域⁵⁾では紀元前2世紀前葉から西北韓系物質文化の影響を受けたと判断される。一方、昌原茶戸里遺跡に代表される洛東江下流域と栄山江流域の西南部地域は紀元前1世紀代の西北韓系物質文化の影響を受けたと思われる。そして、琴湖江流域では紀元前2世紀後葉から西北韓系物質文化の特徴が見られはじめ、楽浪郡設置以前から鉄器の流入が確認される。

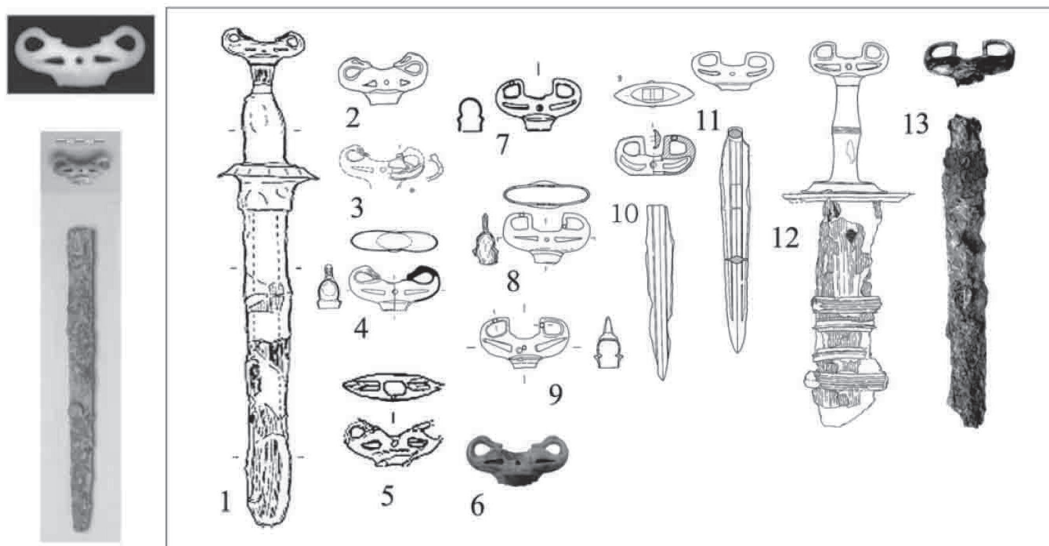
また、双鳥形触角式剣、側面隆起線を持つ鑄造鉄斧 (I B-2型)、小銅鐸などが西北韓系金属器との類似性を共有している。これと関連して、いわゆる辰韓圏域といえる琴湖江

流域に西北韓系物質文化が拡散する過程で、北漢江流域の遺跡と遺物に注目してそのルートを想定している (金想民 2009、朴善美ほか 2012)。

(2) 北漢江流域における西北韓系金属器の辰弁韓圏域への展開

北漢江流域における西北韓系墳墓出土の金属器は、辰韓圏域の琴湖江流域出土の金属器と類似性が強く、双鳥形触角式剣は両地域が共有している代表的な金属器である。双鳥形剣把頭飾のうち、別鑄式銅柄鉄剣の場合、西北韓と東南部地域の事例を根拠に西北韓-中部-東南韓という地理的ルートに沿って普及していることが明らかである (李清圭 2013)。

双鳥形触角式剣の中でも組立双鳥形触角式剣 (朴善美のⅢ型) に分類されるもので、鳥の頭の形が写実か単純かによって細分化され



南楊州 琴南里 1~6. Ⅲa型(1. 加平 達田里 2. 伝平壤 3. 永川 龍田里 4. 伝大邱 飛山洞 5. 大邱 新西洞 6. 伝韓半島-辰馬考古資料館) 7~13. Ⅲb型(7. 慶山 内里里 8. 伝池山洞 9. 慶山 林堂洞 10. サカドウ 11. タカマツノダン 12. 大邱 鳳舞洞 13. 蔚山 蔣峴洞) (スケール不同)

図 8 韓半島南部地域の双鳥形触角式剣の現況 (朴善美ほか 2012)

ている (朴善美ほか 2012、朴スジン 2016、宮本 2020)。鳥の頭の形についてその変化様相に対する異論はあるが、写実的なものから単純化されたものに変化し、単純化されたものは大邱をはじめとする琴湖江一帯に限定的に分布している。北漢江流域の達田里、琴南里に副葬された組立双鳥形触角式剣は写実的な鳥頭形を持つもので、永川龍田里、伝大邱飛山洞、大邱新西洞のそれと似ている。先行する写実的な形状の鳥頭形は伝平壤の資料と土城洞 486 号墓出土品を根拠に、北方青銅器文化を基盤に西北韓地域の土着集団で再創造されたものと考え (朴善美ほか 2012)、単純化した形状の鳥頭形は琴湖江流域が中心であ

ることを根拠に、東南部地域内で製作されたものとする (宮本 2020)。つまり、組立双鳥形触角式剣は西北韓地域と関連した金属器の一つとして、土城洞 486 号墓に副葬された双鳥形触角式剣を原型とする衛満朝鮮独自の文化である。これと関連して宮本一夫は、西北韓地域における双鳥形触角式剣の登場背景について、衛満政権期の韓半島の独自性を強調し、漢王朝とは異なるアイデンティティを生み出す過程で登場したと推定した (宮本 2020)。琴湖江流域を中心とした辰韓圏域内で見られる西北韓系双鳥形触角式剣の存在や、大邱八達洞・月城洞、慶山林堂遺跡などの古い段階の初期鉄器の存在は、西北韓地域

表 4. 原三国時代の中中部地域と東南部地域間の交易ルート (朴敬信 2018)

交易路線名	交易ルート
環黄海路線 (三韓)	山東-遼東-西北韓-仁川-湖南西海岸-南海岸-日本
中部内陸路線 (中島類型)	北漢江-南漢江(右岸)-鷄立嶺-洛東江上流 (聞慶・点村)
中西部路線 (馬韓系)	鎮川(牙山)-清州-燕岐-錦江上流-花嶺-尚州-義城-英陽-金泉
東海岸路線 (加平里類型)	元山-襄陽-江陵-東海-(旌善)-(奉化)-蔚珍-蔚州

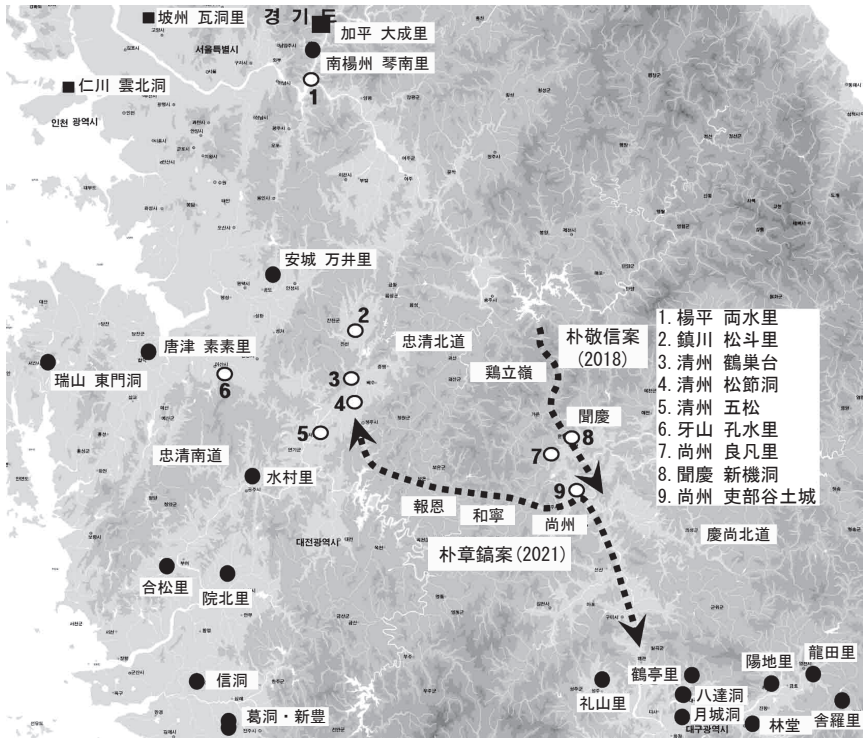


図9 中部地域と東南部地域の相互交流ルート

の衛滿朝鮮と関連していると考えられる。このような観点から北漢江流域の南楊州琴南里、加平達田里・大成里遺跡で見られる金属器は西北韓の衛滿朝鮮・楽浪系物質文化を辰韓圏域とつなぐ拠点の役割を果たしたと考えられる。

では、北漢江流域をはじめとする中部地域を經由して辰弁韓圏域に展開するルートはどうか。これまで、韓半島西南海岸の島嶼地域の貝塚および集落（勒島遺跡など）、九州地域の島嶼および沿岸地域の集落（原の辻遺跡など）に見られる漢式遺物、昌原茶戸里遺跡に副葬された大量の漢式遺物は、楽浪と関連するものと比定されてきた。海路を利用した西から東へ向かう楽浪郡の物質文化の移動に焦点が当てられたのである。

一方、西北韓系物質文化の南下という観点から、側面に隆起線がある鑄造鉄斧（I B-2

型）に注目し、龍淵洞→楽浪土城→台城里→八達洞出土品につながる系譜関係を推定した（金想民 2009）。また、大同釜山里収集類型を根拠に I B-2 型鉄斧が西北韓の衛滿朝鮮の系統であり、韓半島南部地域では辰弁韓地域で盛行する点に注目し、古朝鮮移住民によって鉄器生産技術が導入され、辰弁韓圏域内で独自の鉄器文化が発達すると考えた（金想民 2018b）。

中部地域と東南部地域の物質文化の展開ルートに対する関心は、馬形帯鉤、有蓋台付壺など紀元1世紀以降、中西部地域と東南部地域で見られる物質文化の類似性に基づくものである。朴敬信は両地域の内陸交易ルートを3つに整理し、北漢江－南漢江（東岸）－鷄立嶺－聞慶－点村（以下、中部内陸ルート）につながるルートに注目した（朴敬信 2018）。一方、朴章鎬は中西部地域から小白

山脈を越えて東南部地域に移動するための交通路を紹介し、その中で清州－報恩－花嶺－尚州（以下、中西部路線）につながるルートを利用したと考えた（朴章鎬 2021）。

このような内陸移動は紀元前1～2世紀代の両地域間の交流・交易を念頭に置いたルートであるが、内陸交易ルートは紀元前2～1世紀代にも有効であったと考えられる。なぜならば、比較的古い時期から北漢江流域では交易的な多元性が見られるためである（朴敬信 2018）。朴敬信は楊平両水里 537-1 番地遺跡 3号住居址から出土した黒色磨研壺は慶州朝陽洞 5号墓のそれと比較でき、6号竪穴から中島式無文土器と三角形粘土帯土器が共存していることに注目した。これは鉄器を中心に点々と見られた両地域の交流様相をより具体化できるきっかけになるかもしれない。楊平両水里遺跡が北漢江と南漢江の合流地域に位置していることを考慮すれば、先に提示した中部内陸路線と中西部路線の出発点になる可能性があり重要である。逆に、辰韓圏域の地域集団の立場からは中部内陸路線は西北韓圏域と、中西部路線は馬韓圏域と関連する交流ルートとなる。これと関連して、辰韓圏域で主に見られる小型板状鉄斧が中西部地域内で確認されることは重要な意味を持つ。馬韓圏域である公州水村里の墳墓では断面台形の鑄造鉄斧と小型の板状鉄斧が副葬されているが⁶⁾、筆者は水村里の鉄器を根拠に衛満朝鮮の鉄器文化が湖西地域を経由して辰韓一帯に伝わったと推定した（金想民 2019）。図9から分かるように、水村里遺跡は前述した中西部路線への近接性が高く、馬韓と辰韓圏域の相互交流を論じることができる事例である。このように楽浪郡設置以前から衛満朝鮮と三韓の諸地域が双方の多元的な交流を行っていたと考えられる資料が確認されている。

そのような意味で、楊平両水里遺跡からほど近い北漢江流域の西北韓系墳墓は、中部地域最大の地域集団の一つである中島文化圏と関連して形成された交流の主体であり、三韓の諸地域につながる内陸路線を積極的に活用した交流の担い手の役割を果たしたのではないかと推定される。

おわりに

近年、南楊州琴南里遺跡の調査を通して加平達田里遺跡など、北漢江流域における西北韓系墳墓とその副葬品が再び注目されている。本稿ではまず、北漢江流域における西北韓系墳墓の副葬品のうち、金属器を中心に個別墳墓間の相互比較を通して相対的な前後関係を設定しその年代を比定した。これにより琴南里遺跡 2号墓と達田里 2号墓に副葬された金属器について、楽浪郡設置以前の衛満朝鮮系金属文化の一つとして設定した。

また、紀元前2～1世紀代の衛満朝鮮系金属器の分布が西南海岸の大河流域で出土することに注目し、紀元前2世紀中葉から西北韓地域の衛満朝鮮系集団と韓半島南部地域の拠点集団間の往来の中で先進的な金属文化が登場すると推定した。中部地域の北漢江流域も衛満朝鮮の段階から中島文化圏を中心とした地域拠点集団との往来があり、このような背景から西北韓系先進文物が登場することになったのである。

一方、北漢江流域における西北韓系墳墓の金属器は、辰韓圏域の琴湖江流域の金属器と類似性が高く、双鳥形触角式剣の事例に注目し、古い時期から内陸交流路線が存在したことを推定した。したがって、北漢江流域と琴湖江流域間に見られる西北韓系物質文化の共有は、楽浪郡設置以前から衛満朝鮮と三韓の

諸地域双方の多元的な交流を示す代表事例の一つといえる。

北漢江流域の西北韓系墳墓は中部地域最大の地域集団の一つである中島文化圏と関連して形成された交流の主体であり、三韓の諸地域につながる内陸路線を積極的に活用した交流の担い手の役割を担ったのではないかと推定した。

本稿は第18回梅山記念講座（2021年10月8日）において発表した「北漢江流域の原三国時代西北韓系墳墓－金属器」を修正・補完したものである。

註

- (1) 前述したように、南楊州琴南里遺跡の報告者は遺跡の造営時期を紀元前1世紀前中葉に比定しながらも4号木棺墓出土粘土帯土器の存在を根拠にその時期がさかのぼる余地を残している（ホ・ピョンファン 2020、漢江文化財研究院 2020b）。
 - (2) 本稿で対象とする鉄器の型式は筆者の拙稿（金想民 2021）に従う。
 - (3) 朴スジンは東アジアの触角式剣について、剣柄の形態と結合方式を基準に双鳥形触角式銅剣の型式を分類した。琴南里と達田里で出土した鉄剣は組立双鳥形触角式剣b式に該当する（朴スジン 2016）。一方、朴善美とマーク・バイントンは双鳥形触角式剣と定義し、3型式に区分した（朴善美ほか 2012）。朴善美らの研究による分類で見るとⅢ型双鳥形触角式剣に属する。本稿では双鳥形触角式剣という用語を適用した朴スジンの分類案を用いる。
 - (4) このような分布様相で空白空間は韓国と北朝鮮の境界である非武装地帯を含む地域
- である。このためまだ発見されていない可能性も高い。本稿は現在の遺跡現況を基にした仮説的なアプローチである点を再確認しておく。
- (5) 万項江流域では完州葛洞、新豊遺跡を中心に燕国と関連した紀元前3世紀代の遺物が確認される。これらは西北韓地域を経由したものと見られるが、その製作地は燕本土と考えられ、本格的な西北韓系物質文化の拡散は衛満朝鮮成立以降と考えられる。

引用文献（カナダラ順）

- 権度希 2017 「原三国～漢城百濟期楽浪系土器および鉄器について－北漢江流域を中心に」『北漢江流域原三国～漢城百濟期文化様相』2017年度中部考古学会学術大会
- 権度希 2020 「中部地域の原三国文化と楽浪」『先史・古代の中部地域と韓半島北部：交流・ネットワーク・文化変動』中部考古学会創立10周年記念2020年度定期学術大会
- 金武重 2012 「中部地域の原三国時代鉄器を通して見た楽浪」『中部地域原三国時代の外来系遺物と楽浪』第9回梅山記念講座
- 金武重 2017 「北漢江流域の原三国～漢城百濟期物質文化の成果と課題」『北漢江流域原三国～漢城百濟期の文化様相』2017年度中部考古学会学術大会
- 金武重 2020 「「南楊州琴南里遺跡」に対する討論文」『中部地域文化遺跡発掘成果』2020年中部考古学会遺跡調査発表会
- 金想民 2009 「韓半島鑄造鉄斧の展開様相に対する考察」『湖西考古学』20
- 金想民 2018a 「東北アジア鉄器文化の拡散と古朝鮮」『韓国考古学報』107
- 金想民 2018b 「韓半島西北部地域の鉄器文化の展開過程を通してみた衛満朝鮮と馬韓」

- 『韓国学論叢』50
- 金想民 2019「湖西地域の初期鉄器と馬韓、そして辰韓」『湖西の馬韓 未知の歴史を目覚めさせる』国立清州博物館
- 金想民 2021『東北アジア初期鉄器文化の成立と古朝鮮』書景文化社
- 金セボム 2014「楽浪の鉄器文化」『楽浪考古学概論』ジニンジン
- 高久健二 1995『楽浪古墳研究』学研文化社
- 盧赫眞ほか 2007『加平達田里遺跡 - 土壙墓 -』翰林大学博物館
- 朴敬信 2018「原三国時代中部地域と嶺南地域の内陸交易」『考古広場』23
- 朴スジン 2016「双鳥形触角式剣の型式分類と変遷」『湖南考古学報』52
- 朴善美・マーク・バイントン 2012「東北アジア双鳥形触角式剣の性格と意味」『嶺南考古学』63
- 朴成熙 2003「京春複線加平駅舎敷地(達田里)発掘調査」『高句麗考古学の諸問題』第27回韓国考古学全国大会
- 朴章鎬 2021「辰・弁韓人の中西部地域移住と歴史的含意」『嶺南考古学』90
- 李南珪 1983「南韓初期鉄器文化の一考察」『韓国考古学報』13
- 李サンギル 2014『原三国～漢城百濟期北漢江流域の鉄器文化』韓神大学校大学院碩士論文
- 李清圭 2013「中国東北地域と韓半島の合鑄式銅柄銅劍・鉄劍について」『白山学報』97
- 呉永贊 2013「衛滿朝鮮および楽浪郡と辰弁韓地域の交渉」『梨花史学研究』第47集
- 鄭仁盛 2009「6. 加平大成里遺跡出土外来系遺物 - 西北韓系遺物を中心に」『加平大成里遺跡 < 本文 2 >』京畿文化財研究院
- 鄭仁盛 2013「衛滿朝鮮の鉄器文化」『白山学報』96
- 村上恭通 2020「中島文化における鉄器の受容と展開」『文献と考古資料の中の古代江原』第3回江原古代文化研究シンポジウム
- 崔煥珉 2017「原三国～百濟漢城期北漢江流域鉄器文化の再検討」『考古学』16-3
- 崔煥珉 2018「鉄器、中部地域原三国時代黎明期の物質文化」『接点 中部地域原三国時代の黎明』第15回梅山記念講座
- 漢江文化財研究院 2017『春川牛頭洞遺跡』本文3
- 漢江文化財研究院 2020a『南楊州00部隊近代化事業敷地内遺跡発掘調査(1区域)専門家検討会議資料』
- 漢江文化財研究院 2020b『南楊州00部隊近代化事業敷地発掘調査略報告書』
- ホ・ビョンファン 2020「南楊州琴南里遺跡」『中部地域文化遺跡発掘成果』2020年中部考古学会遺跡調査発表会
- 朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会 1989『朝鮮遺跡遺物図鑑2 古朝鮮・扶余・辰国編』
- 宮本一夫 2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣
- (原文: 金想民「北漢江流域における西北韓系金属器の出現と展開過程」『考古学』第21巻第1号、中部考古学会、2022年、pp.115~137)
- 謝辞: 本翻訳について快く承諾していただいた金想民先生に文末ながら感謝いたします。なお、本翻訳および関連資料の調査において科研費(課題: 22KK0009)の支援を受けた。